

寄せ場に生きる人間の 絆を求めて

全港湾関西建設支部
西成分会書記長
野崎 健さん



山本五郎分会長



泊寛治副分会長



片田幹雄執行委員



野崎健さん

石橋一秀（ルポライター）

釜ヶ崎解放を目指して
闘う

「釜ヶ崎は変わってきた」といわれる。ドヤが「ビジネスホテル」になり、外観上きれいになったと。またこの数年来ここに流れ込んでくる労働者も急増している。情報に敏感な日雇労働者たちは、「釜ヶ崎には今、仕事がある」との噂に吸い寄せられる。炭鉱、鉄鋼、造船などの失業者で、釜ヶ崎に流れ込む人も多いと聞く。雇用の流動化、大量失業が常態化しつつある今日、最底辺の寄せ場で闘う人びとの眼はやさしく、かつ鋭い。

低辺から鋭く 人間を問い続ける心さ しい労働者たち

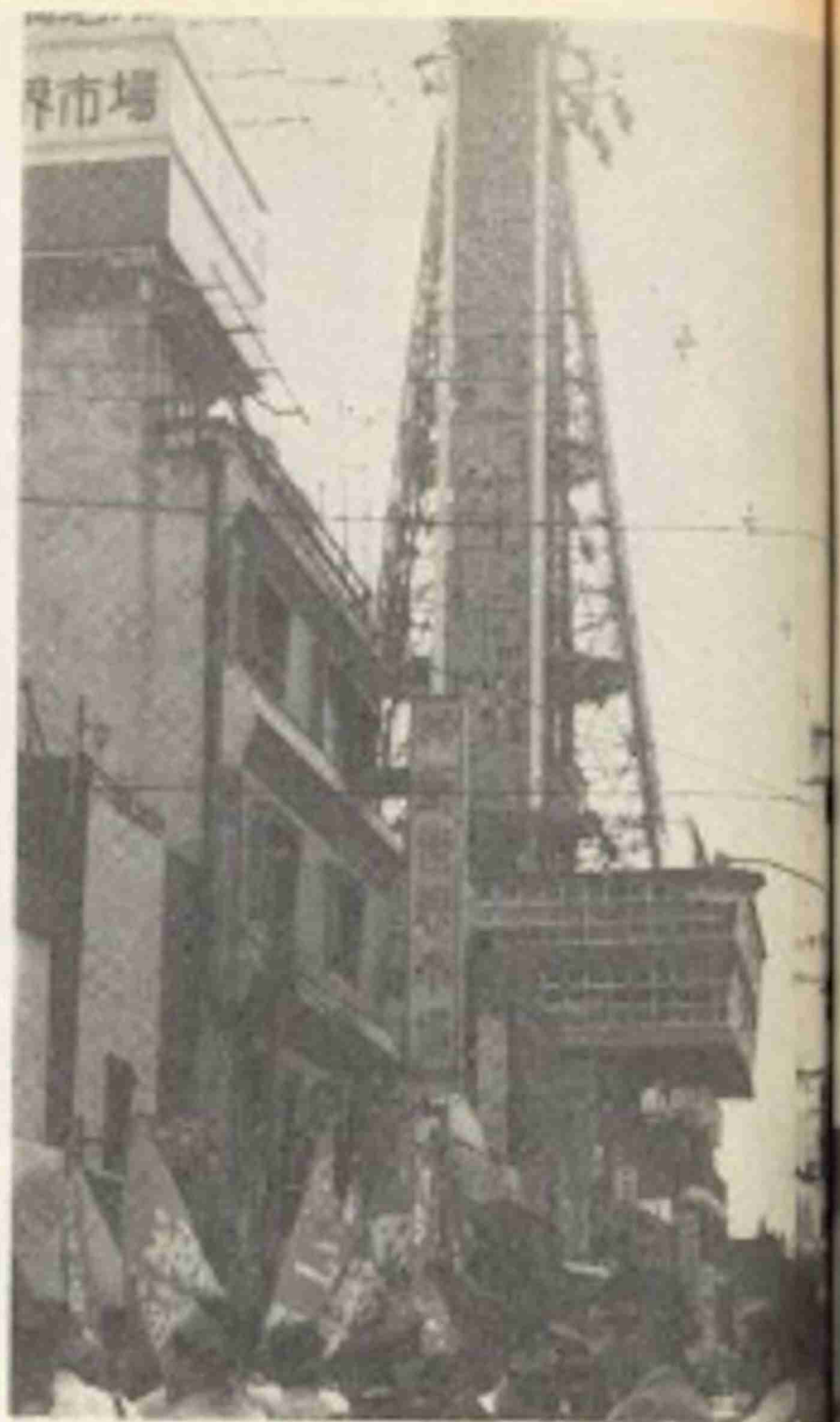
職安は「自動支払機械」

「オーイノ 閉まるぞ。急げ、急げ」
「待ってくれ」

朝、八時三十分ごろ、白手帳をかざした男たちが階段を駆け昇り、閉じかけた窓口に走り寄る。やがて「ガーン」と薄暗い、コンクリートの広いフロアに、無情な音が響きわたる。

大阪・釜ヶ崎、あいりん職安の失業認定窓口で毎朝繰り返される一コマ。この日は雨だったため、八時少し前から二つの窓口に、労働者たちの長い行列ができた。毎朝この場に立ち会っている全港湾関西建設支部西成分会の書記長・野崎健さんが、七〇〇〇人くらいだといった。ものすごいスピードで行列は動く。その日仕事にアブレた労働者たちが、失業認定を受け、アブレ手当（日雇失

釜ヶ崎メーデーで、通天閣の下をデモ



↑西成分会の事務所
→西成分会の事務所
内で打合わせ



業給付)を受け取るために、白手帳（日雇雇用保険手帳）を職安の窓口に出して行くのである。野崎さんが初めてこの場に立ち会った一五年前、窓口には並ぶ労働者は二〇〇—三〇〇人だった。窓口は五分もたたず閉じられていた。野崎さんたち西成分会の人たちは、手帳を出し運んでしまふ労働者のために「せめて二〇—三〇分くらい窓口を開けておいても良いじゃないか」と、毎朝、職安の職員とケンカしたのだという。それが今、一万人以上並ぶのも珍しくなくなった。

どの事務所、五階が大阪社会医療センター、六階以上が市営住宅という巨大な建物。一日の仕事を始め、朝の食事をとり、失業認定を受け、アブレ手当を受ける。釜ヶ崎の労働者の生活は、実にこのセンターから始まる。

午前五時、センターの周りをとり囲むように、求人・送迎用のマイクロバスやバンがズラッと横付けされ、巨大なシャッターが開く。

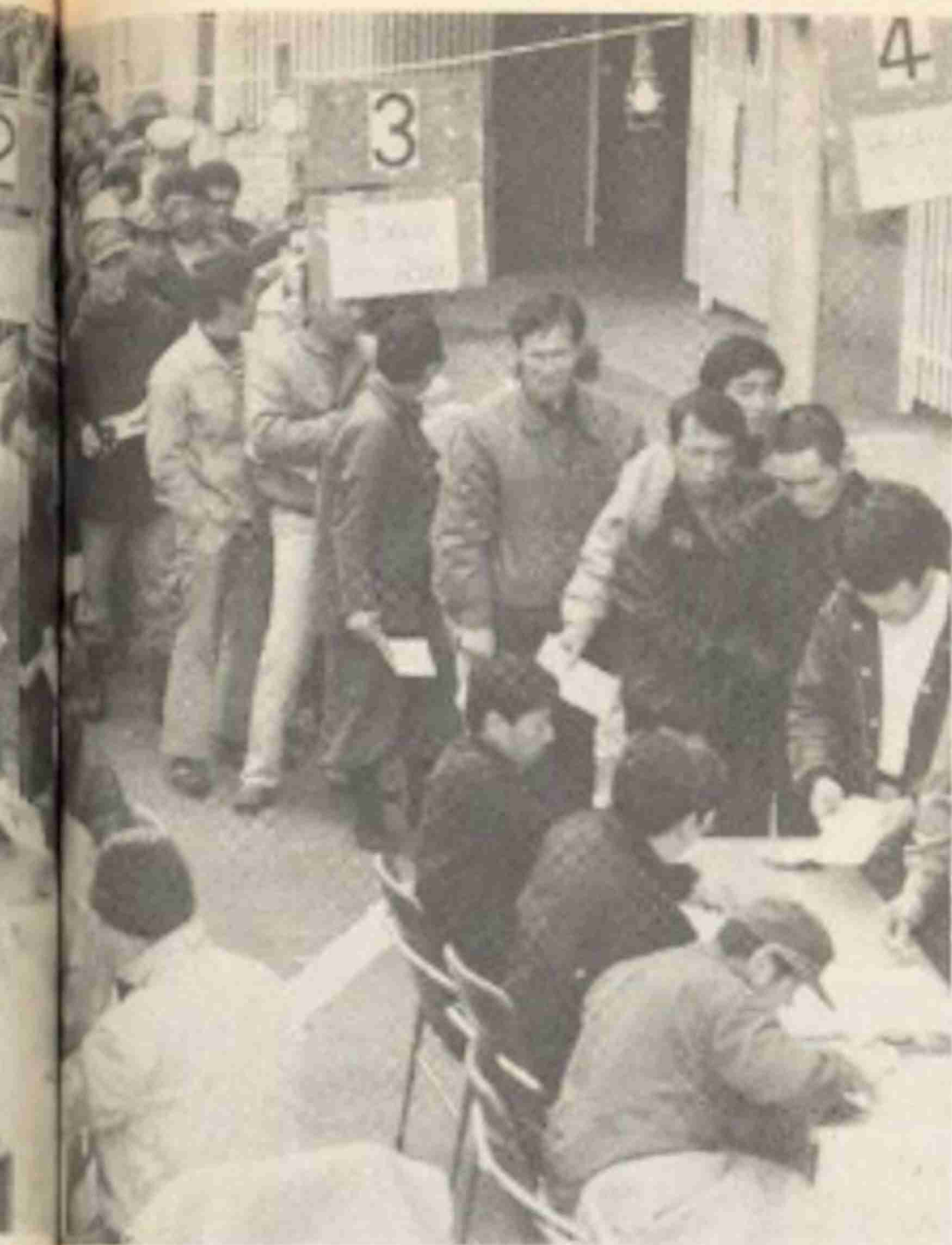
「毎年三月は仕事（求人）が多く、四—六月が一番落ち込む。今年の三月は統一地方選挙がらみで、特に多いんです。四月の中頃まで続くでしょう。しかしその後の落着も、いつもより寂しいと思います」と野崎さんは心配げだ。

この職安は仕事の紹介をしない。極端にいえば、失業認定をしアブレ手当を支給するだけだ。野崎さんは「職安は、ただただ、形式的な資格要件にみあう手帳に金を払い続けてゆく。でさの良くない『自動支払機械』機関」と、口が悪い。だが、この皮肉な表現が、釜ヶ崎の「労働市場」「寄せ場」の構造をよく示している。

労働者は急増だが求人は減

ここでの仕事の紹介は、労働福祉センターに登録している業者（口入れ屋）が、センター一階で、求人条件を示したプラカード（センターから交付）を基に労働者と直接交渉することによって行われる「相対方式」と呼ばれ、いわゆる手配師を合法化したようなものだ。が、センターの周辺では「非合法」な手配師が相変わらず労働者に声をかけている。

西成分会の一日も、センターのシャッターが開くと同時に始まる。求人寄せ場の入口近くに一台の机を出し、日刊ビル「大阪城」を配り、労働者からのよろず相談を受ける。白手帳の再交付申請



炭鉱、造船など構造不況業種から吐き出された失業者が仕事を求めてくる

書なども用意している。永年この机を守っているのが、副分會長の余川さんと執行委員の田中さんという、立派なヒゲをたくわえた二人の年輩の労働者だ。二人とも六〇歳をとうに超えているのだが、元氣なところは中年の労働者にはるかに勝る。たくさんの労働者が机の前へ来ては、「大阪城」を受け取り、余川さんや田中さん、周りにいる組合員と言葉を交わして行く。「仕事あったかね」今

日はアブレだあ「今日は学習会やるから、ヒマだったら来いやー」備身者ばかりで、声をかけ合うことが人とのつながりを持つ絆でもあるかのようだ。

あいらん職安に求職登録し、白手帳を持つ労働

者（有効求職者）数は、一九八七年二月末現在で二万四一五二人だが、この数年、毎年一〇～二〇%ずつ増加している。

釜ヶ崎の労働者は流動性も高いのでその実数はつかみにくく、唯一の目安が白手帳所持者の数だが、それも労働者全体のほぼ三分の二か、半分にすぎない。一平方キロにも満たない地域に、ドヤや商店の経営者、その家族などを含めて、一〇万人近くがひしめき合っている。それが釜ヶ崎である。

「釜ヶ崎に行けば仕事がある」そんな噂が、期待感とともに、情報に敏感な日雇労働者の間に流れている。客観的条件は確かにあるのだ。全国的な失業の増大が第一の要因に違いないのだが、なぜ釜ヶ崎か、という点では、関西新空港建設工事とその関連工事、大阪二一世紀計画に関わる建設プロジェクトが数多くぶち上げられ、既に進行している関連事業もある。

そこで、仕事を求めて移動する土曜労働者、炭鉱や鉄鋼、造船など構造不況産業から吐き出された失業者、半失業者、製造業などへの行き場が閉ざされた農村出身労働者などが吸い寄せられて来る。

だが、それに相応して仕事が増えているかといえば、実際には減少。労働者数が二〇%近く増加したのに反比例して、日々雇用の就労は二二%減、短期契約の就労は三三%の増減にとどまっている。対してアブレ手当の受給者は二四%も増加、前々年比では九〇%もの大増である（八六年四月）。

現場仕事の機械化が進み、土木、建設作業でも必要とする人手が少なくなった。また日雇賃金が上昇した分、労働密度も濃くなり、年輩者でもできる単純な仕事が無くなった。などの事情によるようだ。それは一方で、釜ヶ崎労働者の入れ替えの促進にもつながっている。八〇年代に入ってから、従来からの釜ヶ崎に似つかわしくないタイプ



↑釜ヶ崎の中心・三角公園
→失業認定の行列はセンターの外まで続く



の労働者の出入りが多くなったこともその現われだろう。

口うるさいおじいさんがいっぱい

木造の古いドヤも次々と鉄筋コンクリートの「ビジネスホテル」に衣替えしつつある。約二〇〇軒といわれるドヤのうち、三分の二以上が、こうした「ビジネスホテル」になり、さらに建替え工事はあちこちで進められている。古い釜ヶ崎の名残りを止めているのは、西成分会のある釜ヶ崎の中心部、三角公園の周辺くらいしかない。



一時金の支給は組合の責任で行われる

外観上は、ともかく旧来の「最低社会」「ドヤ街」のイメージを一新しつつある。野崎さんは、「釜ヶ崎は開放された。解放ではなく開放です」と、アイロニーを混えていう。さらに「これまでの釜ヶ崎にいわれたような形容が、それ自体まだ脈

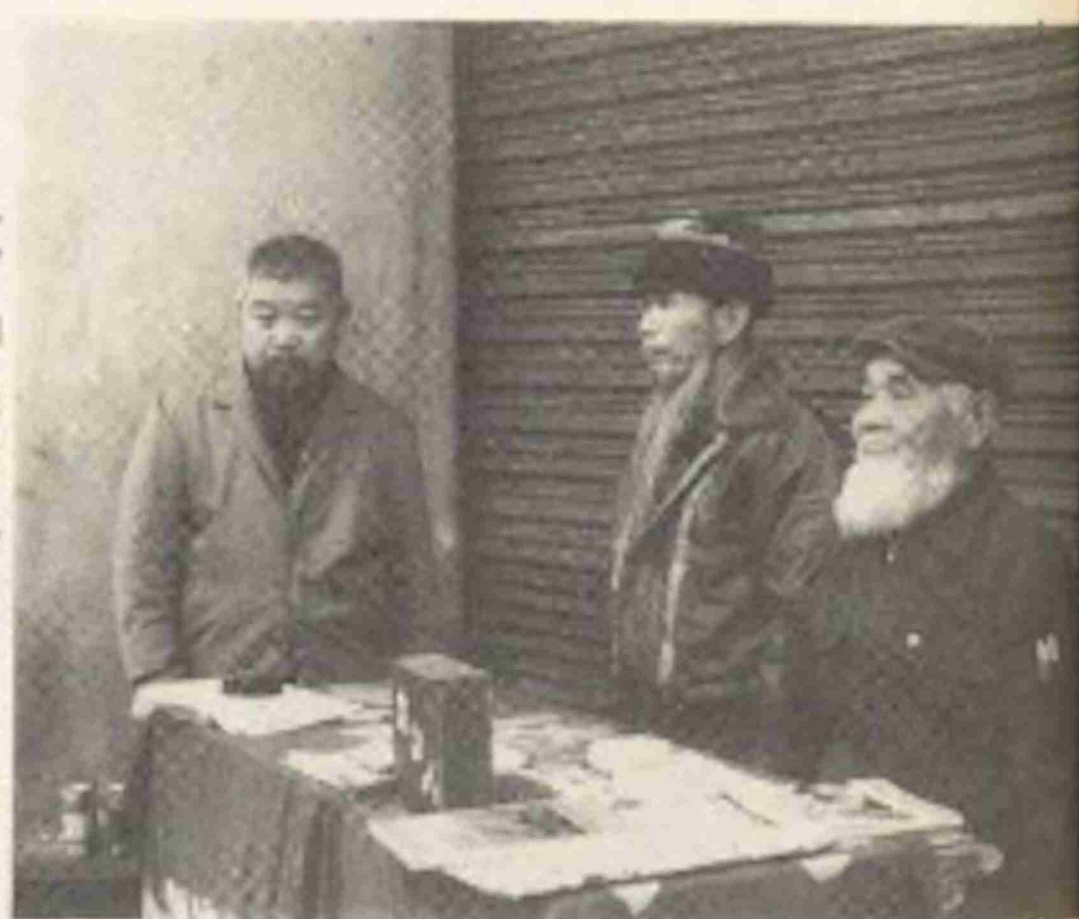
資本の攻撃は巧妙だ。自らの資金的負担をほとんど負わず、労働者を切りすてる

まっていなくても、我々が目の前にしているこのダイナミックな変貌の内容を語るには、語意がなさすぎるし、分析・表現する内容があまりにも貧弱です」と語る。

野崎さんは釜ヶ崎に来て、もう一六年になる。京都の大学を中退してここに来た。いわゆる全共闘世代の最後に属する。

北海道で高校までを過ごした野崎さんにとって、東京一大会は憧れだった。自分が独立して生きて行くには、都会に出て自分の足場を固めてという思いと、都会は華やかなものというイメージとが混然一体となった。が、一方で、中学生のころテレビの報道番組で見た東京・山谷の暴動が、華やかな都会の隠れた部分としてまとわりついていった。

「釜ヶ崎に労働組合」のニュースは、大学に失望感を抱いて苦悩していた野崎さんにとって、「変わるんだなあ」との思いを抱かせた。



分會も朝も朝から机を出して労働相談を受ける。左から山本さん、余川さん、田中さん

ふらっと来てしまった釜ヶ崎で、当時、組合結成から関わっていた泊寛治さん（現副分會長）らと会い、分會事務所に着いた。

「ポケットを見たら数円しかないんです。金もないし、働かなきゃあかん。それでずっと泊まって、日雇の仕事をしようになった」ところが半年ほどで、それまでの不規則な生活と急激な肉体労働がたたって、病に倒れた。生活保護を受けながら、釜ヶ崎に近い小さな病院に一年間入院。この間、現分會長の山本五郎さんら年輩の日雇労働者の組合員が気づかって何度も訪ねて来てくれた。

「今うちの組合の作風でもあるんですが、五〇、六〇歳の口のうるさいおじいさんがいっぱいあるんですよ。そういう人たちがいっぱい居られる組合ちゃうんが、この地区にあって、何となく、無邪気ちゃうと愛ですが、無心に活動やれるというのが良いんじゃないかと……」と、野崎さんは西

成分會の原点ともいえるやさしさ、「作風」が心に残ったという。

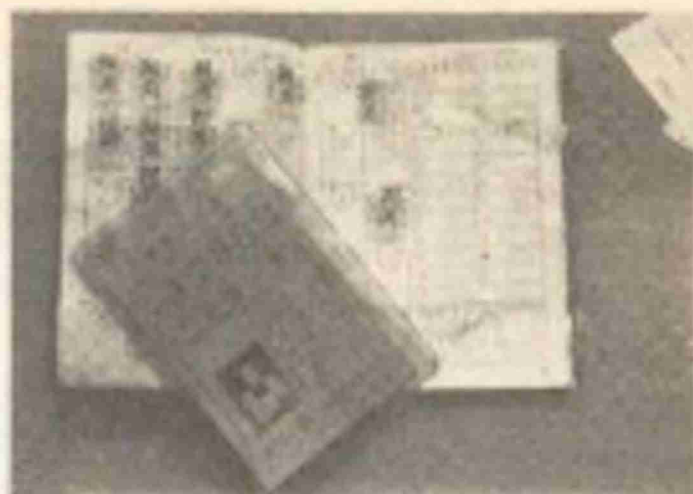
ドヤから追いたてられる労働者

野崎さんが初めて釜ヶ崎に来たころ、日雇賃金は二、〇〇〇円で、アプレ手当は一日七だった。それから一六年たって、賃金は四・五倍の九、〇〇〇円、アプレ手当は八・二倍の六、二〇〇円にも上がった。それに夏の一時金「そうめん代」一万四〇〇〇円（八六年）、冬の一時金「もち代」二万二、一〇〇〇円（同）も支給されている。

これらはもちろん、泊さんや野崎さんら西成分會の人たちが、文字通り血のにじむ闘いの中で勝ち取ってきたものに他ならない。権力に弾圧されたことも、建設業者にあざけられたことも、他のグループからリンチを受けたことも、幾度となくあった。が、それらを乗り越えて、日雇労働者の生活確保の基盤を少しずつ築き上げてきた成果である。

しかし、資本の攻撃は巧妙である。計算上、相当な金が釜ヶ崎に落ちることになった。実は、資本が自らの資金的負担をほとんど負わず、使いただけの労働力を使い切り、また切り捨てる、そういう労働者のプールを、労働者から取り取った税金や雇用保険によって留保しておく。しかも労働者が生命を切りきざんで得た日雇賃金とアプレ手当は、ドヤ代の高騰や金融など様々な方法で、よってたかかって、労働者のブライドと共にむしり取って行く。そんな構造がこの釜ヶ崎に一層浸透し確立されつつあると思わざるを得ない。

これまでのドヤは五〇〇～六〇〇円、高くても一、〇〇〇円もかからなかった。ところが最近では三畳ほどの部屋で一泊一、五〇〇円以上が普通になった。高いところでは三、〇〇〇円というところ



白手帳と写真カード。就労日には印紙をはる。

るも多い。これでは釜ヶ崎の外にあるマンションの方がまだ安いくらいだ。

「冷暖房、テレビ完備。ハードな裏ビデオを見て泊まれるなら、映画館に行くより安上がり」という労働者もいるが、多くは「こんなに高くなったら、もうここには住めなくなる」という。事実、路上や公園でのアオカン（野宿）も増えているし、釜ヶ崎の外に寝ぐらを求める労働者も増えている。

釜ヶ崎の労働者の生活圏は、遊びの空間として、通天閣のある新世界から昔ながらの遊郭、飛田までの一帯を含んでいる。釜ヶ崎に住めなくなった労働者は、その中間に位置する山王町辺りに安いアパートを借りて、センターに通ってくる。あるいは、天王寺公園やミナミの地下街に寝泊りする。この辺りではまだ釜ヶ崎を中心とした行動範囲である。さらに離れる人は、半タの梅田の地下街まで流れて行っている。

人間解放の闘いは、極めて地味ではあるが、魅力的な労働組合の闘いでもある

釜ヶ崎を気軽に利用する労働者が急増し、流入が激しい反面、寝ぐらを求めた流出も多くなっているのである。

釜ヶ崎解放戦士の陣「この道より他の道なし」の基礎銘で、共同墓地を作る。



釜ヶ崎のメインストリートを歩くと、「手帳でお金貸します」という「手帳金融」の看板を数多く見かける。アプレ手当を貸すのに絶対必要な「写真カード」を担保に、一万円、二万円を貸す「日曜版サラ金」である。利息は現在日歩一五銭。

手帳金融・ヤミ印紙に苦悩

写真カードは、朝八時に白手帳を提出した労働者が、一時間にアプレ手当を受け取る時必要なもの。この写真カードを手帳金融の店に預けると、ポラロイドカメラで逃亡手配用の顔写真を撮られ、借りる金から利子分を予め差し引いて残額を渡してくれる。

アプレ手当の支給を受ける前に店に寄って写真カードを出してもらい職安へ行く。そしてまた、「つけ馬料」と称する「手数料」＝利息を店に支払い、

「現代と闘」のテーマで学習会



写真カードを再び預ける。そうやって数ヵ月続けると元金以上の利息を支払ってなお元金は一向に減らない。高利ではあるが、それを証拠だてるような契約書、領収書の類は一切ない。

いくらたっても元金が減らず、借金は増えるばかり。もちろん労働者も単身で身軽だから、逃亡することもあり、認定時や一時金支給時に、コワモテのオニイさんたちが顔写真を持ってうるついたりしている。結果、いよいよ返済ができなければ、金融業者が経営するタコ部屋行き、となるそう。

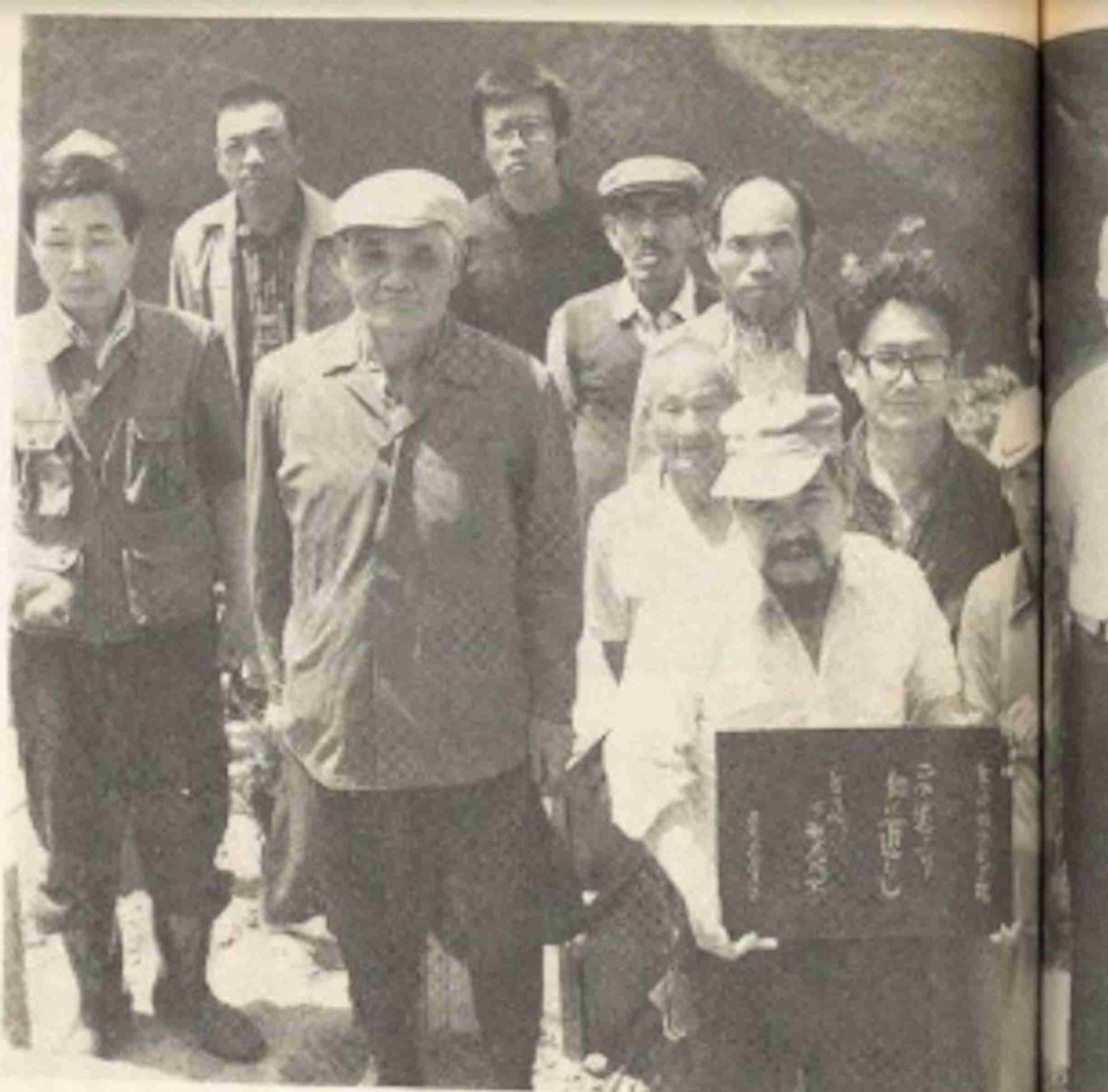
こういう「手帳金融」のお世話になっている労働者は事実多いのである。さらには、これとセットになった「ヤミ印紙」の販売も闇に根を張っている。現在一枚一四六円の印紙を一枚一、〇〇〇円で売り、アプレ手当の受給資格を作る手伝いをしようというもの。これに手を染めれば、実際に働かなくてもアプレ手当を不当に受け取ることができるのである。金融業者はより多くの「顧客」を得、うま味のある商売ができる。

制度の悪用には他ならず、しかも労働者を不正行為の共犯者に引きずり込み、労働者としての主体を崩壊して行くもの。摘発されてつかまるのは労働者だけである。

「よってなかって労働者から金を吸い取って行く。労働者が鶴岡の鶴になつて」と野崎さんはいう。

こうした「金」の問題、釜ヶ崎の解放ならぬ「開放」によるグリーン作戦によって、西成分会は新たな局面に立たされている。

「以前は、貧しいは貧しいなりにやりくりした。たし、人間的な信頼や連帯も強かった。資本主義の最も本質的で露骨な経済的統制支配というんか、それをかぶるのは全くの独り、個人ですから、金融の問題が出てきて深刻になりました。この労働者には家族や集団やらというものがあられ



感度鋭いやさしき労働者たち

午前八時の認定から一時のアブレ手当支給までの間、西成分会が学習会などの活動を組み込む時間帯である。釜ヶ崎ではこの時間帯が一番落ちついている。一時過ぎれば酒が入る人も多くなり、バクチも始まる。労働者は朝早いこともあり夕方以降はあまり外に出てこない。仕事に行った人も夕方帰ってくれば、一パイひっかけてドヤに入ってしまう。

この日の学習会はちょっと変わっていた。テーマは「現代と詩」。大阪在住の詩人・向井孝さんが大逆事件と幸徳秋水などについて詩人の思いを語った。

参加者は年輩の労働者を中心に三〇人ほど。分会で詩人と呼ばれているトミちゃん、憲法論議に詳しく今は生物学、医学を勉強し「東京はブルジョアの街、大阪はプロレタリアに理解のある街」という放浪の労働者、人間にとっての幸せ、宗教とは何だろうと問題提起する労働者、釜ヶ崎労働者内部の差別を指摘する労働者、大逆事件をとんでもなく誤解していた労働者、二日働いて一日休むペースで働き自由があるから良いじゃないかという三〇代の労働者、そして釜ヶ崎に来て二五年という分会長の山本さん、軍隊では刑務所に入っていて戦争に行かなかったという釜ヶ崎三〇年の

余川さんなど、それぞれに個性豊かな人たちが熱心に話を聞いた。今さらながら、この人たちの感度の鋭さと、知識吸収意欲の強さを思い知らされた。

学習会は月一回のペースで毎日続けられ、労働安全講座、雇用改善、春闘学習会、結核予防や精神衛生アルコール問題、時事、政治問題などの学習会ではすでに成功をおさめている。が「精神面でもう一つ発展させる領域があるんじゃないか」として、今、より人間の内面に向かう分野での学習会への取り組みが模索中だ。労働者の人間的な側面が労働者意識とともに磨りなく磨き上げられていくように、釜ヶ崎の労働者がより生き生きとしているだけに、果敢な闘いのように思える。

大学をやめて釜ヶ崎に飛び込んだ専従の泊さんや野崎さん、片田さんと彼らに絶大な信頼を置く、最も人間的ともいえる労働者たち、この人たちの釜ヶ崎解放・人間解放の闘いは、極めて地味ではあるが、やさしさに満ち、かつ最も根底的、魅力的な労働組合の闘いであろう。

●のざき たけし

一九四九年七月二日、北海道江別市生まれ、三七歳。高校卒業後東京で浪人生活を送り、この間に東大闘争など大学闘争を見る。

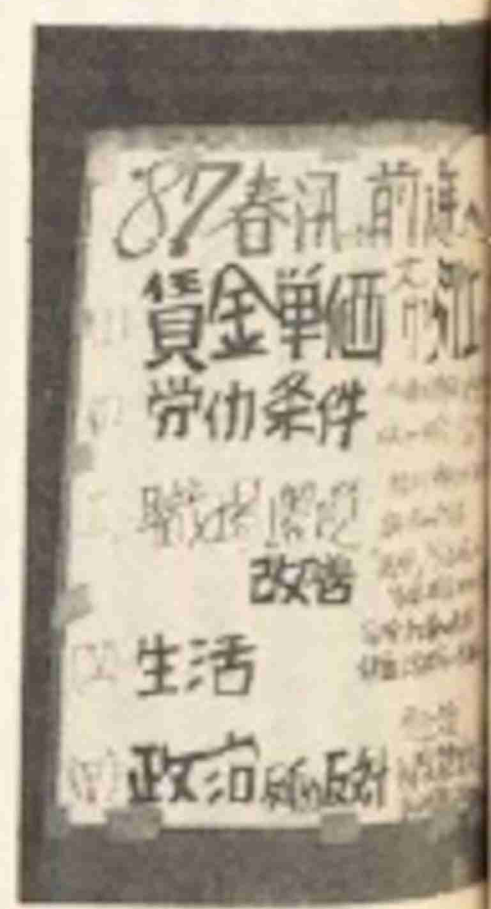
七〇年、京都大学経済学部入学。京大闘争にも関わり大学・教授たちの誠意のなさ、失望、学生運動でも苦悩し、七一年末に釜ヶ崎に入る。六九年五月に結成された全港西成

分会のニュースをある雑誌で知り、自分なりに気にかかっていたことでもあり、「一回行かなあかん」と思った。その結果、フラッと行って分会に泊り、金もなかったの、そのま

ま釜ヶ崎に居ついた。病氣療養後再び戻り、七三年から本格的に専従として組合活動に入る。このころ、分会が最も苦しい時期だった。七九年、同じ釜ヶ崎の

福祉施設で働く女性と結婚。長男七歳、長女五歳、次男三歳の三人の子供があり、釜ヶ崎の近くに住む。釜ヶ崎の生活には苦しみも多かったが、三人とも元気が何より。長

男は釜ヶ崎のそばの小学校に通う。共に釜ヶ崎に生き、運動している夫婦だが「三三三」の話も時には出てしまふとか。教育の問題は難しいとらふ。



87春闘要求のタテカン